色彩教材研究会通信　No.405　2024.8.29

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●秋の研究会大会での発表のすすめ

すでに周知されている通り、秋の研究会大会の申込締切が９月２日（月）に延長されました。色彩教材研究会会員のみなさま、ぜひ発表をしましょう。発表されることにより以下のメリットがあると考えています。

①研究発表の起点となる

秋の研究会大会は、初めてご自身の研究や作品を発表される絶好の機会と考えられます。内容が未完成でも、発表が未経験でも問題ありません。その発表を通して、第一歩の踏み台していただきたいと願っています。

②研究内容の質を高めることができる

研究発表会において様々な助言を得ることができ、新しい気づきが得られます。色彩教材研究会には研究者、デザイナー、カラーコーディネータなどの実務者が属しており、さまざまな観点からの気づきにより、研究内容の質を高めることに繋がります。

③実績→専門性→社会への還元

発表を行うことによって実績となります。秋の研究会大会、全国大会、論文などの実績を積み重ねることで、ご自身独自の専門性を高めることに繋がります。独自の専門性が社会を変えることもできるかもしれません。

（吉澤陽介　主査より：006）

源氏物語の色 -53-「浮舟」

薫、二十六歳の年の冬、匂宮は秋の夕べに二条院で偶然、逢った女のことをいまだ忘れられずにいた。宇治の山荘に薫が住まわせていることをつきとめた匂宮は、翌年新春のある晩、薫と偽って部屋へ入り、その女、浮舟と契ってしまう。驚き嘆いた浮舟だが、感情を表に出さず冷静な薫とは対照的な匂宮の激しい情熱にしだいに心惹かれていく。二月、再び宇治の山荘を訪ね、一夜を過ごした匂宮は浮舟と別れがたく、早暁、宇治川の対岸にある小さな家へ、小舟に乗って、浮舟を連れ出す。

浮舟は上着を脱いで、着慣れてやわらかくなった白い衣を五枚ほど着ていて、色を重ねた袿（うちぎ）姿よりも優美であると描かれている。翌日の浮舟は濃き衣に紅梅の織物など、取り合わせのよい服装とある。濃い紅（または濃い紫）の袿の上に紫の経糸と紅の緯糸の織物という姿であろうか。

雪景色の頃、白い衣のみを重ねてまとう姿、対して美しく色を重ねた装束、そのどちらの描写にも平安の美意識を感じる。

この後、薫が匂宮との真相を知ることとなり思い悩んだ浮舟は宇治川に身を投じる決意をする悲しい物語へと続く。（平山和香子）

● 万葉集のなかの色名 -16

五月の　花橘を　君がため
　珠にこそ貫け　散らまく惜しみ
大伴坂上娘（巻８-1502）

秋萩は　咲くべくあるらし　わが宿の
　浅茅が花の　散りぬる見れば
穂積皇子（巻 8-1514）

女郎花　秋萩まじる　蘆城の野
　今日を始めて　万代を見む
（巻 8-1530）

草枕　旅ゆく人も　行き触れば
　にほひぬべくも　咲ける萩かも
笠朝臣金村（巻 8-1532）

萩の花　尾花葛花　撫子の花
　女郎花また　藤袴朝顔の花
山上憶良（巻 8-1538）

巻８の花を詠んだ歌を抜き出してみた。花の名前がその当時に使われているので、色名としても使われていた可能性はあると思われる。「花橘」は橘の花。襲の色目では、表は朽葉、裏は青。「浅茅の花」は茅の穂花。「萩」は白か淡紅色。「女郎花」は黄色。最後の歌は秋の七草。「撫子」は山野に生え淡紅色。「石竹」は「からなでしこ」とも言われ園芸種。「朝顔」は今の桔梗、木槿、昼顔と諸説がある。

＊講談社文庫・中西進・万葉集から　（永田泰弘）